

看護学生アイデンティティ尺度 (SEINS) の開発 および信頼性と妥当性の検討

浜多 美奈子¹⁾, 比嘉 勇人²⁾, 田中 いずみ²⁾, 山田 恵子²⁾

1) 医療法人ホスピター 浦田クリニック

2) 富山大学大学院医学薬学研究部精神看護学

要 旨

【目的】看護学生としてのアイデンティティ (看護師を目指す一貫した自己意識) を測定するために, 看護学生アイデンティティ尺度 (Scale of Ego-Identity for Nursing Student: SEINS) を開発し, 信頼性と妥当性について検討する。

【方法】まず, 同一性地位判定尺度12項目 (ISS: 加藤, 1983) を参照し, 原案12項目6件法を作成した。次に, 看護学生A群313名を対象に, 本原案を用いて質問紙調査を実施し因子分析を行った。最後に, 看護学生B群79名を対象に, 因子分析後の尺度を用いて, その信頼性と妥当性の検討を行った。質問紙には, 属性, 身体的健康感, ストレス感, 多次元自我同一性尺度 (MEIS) を加えた。

【結果】A群の有効回答者は284名であり, B群の有効回答者は78名であった。因子分析の結果, 8項目2因子が抽出され, 第I因子4項目を「達成志向」と命名し, 第II因子4項目を「寄与志向」と命名した。「達成志向」と「寄与志向」の因子間相関係数は0.63であった。これをSEINSとした。累積寄与率は39.50%であった。信頼性については, $\alpha=0.77$ と $r=0.82$ で確認された。妥当性については, $r=0.58$ で確認された。SEINSと身体的健康感には, $V=0.28$ が確認された。

【考察】SEINSと正の相関を認めたMEISの下位尺度には「心理社会的同一性 (社会との適応的な結びつきの感覚)」や「対自的同一性 (自己意識の明確さの感覚)」などがあることとSEINSの下位尺度の項目内容から, 「達成志向」は「看護の方向性を見定め達成しようとする自己意識」と定義し, 「寄与志向」については「看護に積極的に寄与しようとする自己意識」と定義した。SEINSの指標判定については, 「23点以下: アイデンティティ拡散傾向」「24-32点: モラトリアム」「33点以上: アイデンティティ確立傾向」と定めた。また, SEINSと身体的健康感との連関係数値から, アイデンティティ状態 (拡散-確立) と身体的健康感 (悪い-良い) の相互関連性が示唆された。以上の信頼性と妥当性の検討より, 開発したSEINSは実用可能な尺度であると判断した。

キーワード

看護学生, アイデンティティ, 尺度開発

はじめに

アイデンティティ (Ego-Identity, 自我同一性) は, Erikson, E. H. が提唱した概念であるが, 明確な定義づけはなされていない¹⁾. そのため, アイデンティティの定義に関して, いくつかの提言がみられる. たとえば, 無藤 (1979) はアイデンティティを「それ以前の全ての同一化や自己像 (~としての自分) をとらえ直し, 新たに社会との関連で選択し統合して, ひとつの独得で首尾一貫した全体として作り上げたもの」²⁾, 鈴木は「斉一性・連続性をもった主観的な自分自身が, 周りから見られている社会的な自分と一致するという感覚」³⁾, 水野は「自己確立 (自分としての連続性や自分が自分であるということに確信が持てること) と社会性確立 (社会の中での自分の位置づけを自覚し社会における自分の役割を引き受けようとする) の2つの側面を統合した概念」⁴⁾と捉えている. これらの言及を踏まえると, アイデンティティには自己の内面および周囲との関係への自己意識が関連していることがわかる. また, 青年期におけるアイデンティティの形成については「実体的な契約に明示されている自分の存在の意味」⁵⁾, つまり職業への意識が関連していることが実証されている^{6,7)}. ここで, 青年期における職業に対する意識とアイデンティティの形成に関連性があるのであれば, 看護学生においても看護職への意識とアイデンティティの形成に関連性があると類推される.

日本において看護師の職業的アイデンティティが注目され始めたのは, 看護師不足が社会的問題となった1990年代からであるが⁸⁾, 看護師や看護学生の職業的アイデンティティに関する研究論文 (医学中央雑誌) は100件に満たない. なかでも, 看護学生の職業的アイデンティティを尺度化した研究論文は見当たらない. よって, 看護学生を対象としたアイデンティティ尺度の開発が, 現在の課題のひとつとして挙げられる.

そこで本研究では, 看護学生アイデンティティの基礎的研究となる「看護学生アイデンティティ尺度」を開発し, その信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とした.

(用語の定義)

Marcia は self-structure (自己構造) としてのアイデンティティ構造を提案しており, アイデンティティを「本能的欲求, 能力, 信念, 個人史からなる, 内的で, 自己内発的に構成された, ダイナミックな構造体 (an internal, self-constructed, dynamic organization of drives, abilities, beliefs, and individual history)」⁹⁾と定義した. そしてこの自己構造がよりよく発達すれば, 自己形成において, 自己の独自性や他との類似性をより理解することができ, また発達が未熟だと, 自分らしさに困惑し, 自己評価において依存的になる, と述べている. このことから, アイデンティティは「自分は他者と違って自分であり, 自分はこういう人間である」といった, 自己に対する一貫した意識の在り様であると捉え, 本研究では看護学生としてのアイデンティティを「看護師を目指す一貫した自己意識」と定義した. したがって, 看護学生のアイデンティティが明確であれば自己の独自性や他との類似性の自己理解が容易となるが, 不明確な場合は自分らしさの自己理解に困惑し自己評価において他者依存的となる.

研究対象と方法

1. 看護学生アイデンティティ尺度原案の作成

Marcia は, 心理社会的領域 (職業, 宗教, 政治的信条) における【危機: 自分にふさわしい職業や信条の葛藤】および【自己投入: 職業および信条に対する積極的な自己関与】の2基準から, 半構造化面接によりアイデンティティの状態を4分類するアイデンティティ・ステータス概念を導き出した¹⁰⁾. その概念に基づき, 加藤 (1983) は, 大学生のアイデンティティ・ステータスを客観的に判定できる「自我同一性地位判定尺度: Identity Status Scale 7 (以下, ISS と略す)」を開発した. ISS は【現在の自己投入】【過去の危機】【将来の自己投入の希求】の各水準の得点を各4項ずつ, 6段階評定 (「全然そうではない」から「全くそのとおりだ」までの1~6点) で算出し, その結果に基づいてアイデンティティを6

分類する尺度である。

本研究では、ISSの12項目の内容を参照して12項目全ての文言を看護学生用に改訂し、これを「看護学生アイデンティティ尺度：Scale of Ego-Identity for Nursing Student（以下SEINSと略す）」の原案とした。SEINS原案は、自己投入の水準を示す【現在の自己投入：質問項目①②③④】、過去の危機の水準を示す【過去の危機：質問項目⑤⑥⑦⑧】、現在の危機の水準を示す【将来の自己投入の希求：質問項目⑨⑩⑪⑫】で構成される。

2. 調査対象

調査1：A大学に在籍する看護学生全313名（1年生～4年生）を対象者A群とした。

調査2：調査1に参加協力した看護学生79名（4年生）を対象者B群とした。

3. 調査期間

2013年2月から同年10月にかけて、調査1および調査2を実施した。

4. 調査1：SEINS原案の精選のための調査内容

SEINS原案の12項目を精選するために、SEINS原案を用いた質問紙調査を実施した。SEINS原案の回答方法はISSに準じ、1.「全然そうではない」、2.「そうではない」、3.「どちらかといえばそうではない」、4.「どちらかといえばそうだ」、5.「かなりそうだ」、6.「まったくそのとおりだ」の6段階評定（1～6点）とした。

なお、調査1では、「項目分析」「因子分析」「内的整合性の確認」を行った。

5. 調査2：SEINS完成版の信頼性・妥当性のための調査内容

SEINS完成版を作成する目的で、「因子分析後のSEINS項目」「多次元自我同一性尺度：Multidimensional Ego Identity Scale（以下、MEISと略す）」「性別」「年齢」「現在の身体の状態（身体的健康感：1.「とても悪い」、2.「あまり良くない」、3.「少し良い」、4.「とても良い」の4段階評定）」「現在のストレス感（スト

レス感：1.「とても感じている」、2.「少し感じている」、3.「あまり感じていない」、4.「全く感じていない」の4段階評定）」で構成された質問紙調査を、調査1を実施した2週間後に実施した。MEISを加えた理由は、SEINSとの類似性を検討するためである。MEISは、谷（2001）がEriksonのアイデンティティ理論に基づいて作成した尺度である。これは大学生を対象に開発されており、自分が自分であるという斉一性と時間的連続性の感覚である【自己斉一性・連続性】、他者から見られているであろう自分が本来の自分自身を一致しているという感覚である【対他的同一性】、自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚である【対自的同一性】、自分と社会との適応的な結びつきの感覚である【心理社会同一性】の4下位尺度20項目からなる。回答方法は、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7段階評定（1～7点）で、合計得点が高いほどアイデンティティの感覚が高いことを示す。また、「現在の身体の状態」と「現在のストレス感」を加えた理由は、アイデンティティの測定結果は測定時の体調と関連する、と想定したためである。

なお、調査2では、SEINSの「尺度安定性」「基準関連妥当性」「各属性との関連性」の確認を行った。

6. 分析方法

統計ソフトはSPSS 22.0 J for Windowsを使用した。

1) 項目分析

調査1では、各項目の平均値±標準偏差を算出し、天井効果・フロア効果の検討を行った。

2) 因子分析

調査1では、項目分析により採用された項目について因子分析を行った。

3) 信頼性の検討

(1) 内的整合性

調査1では、SEINSの尺度全体と各因子のCronbachの α 係数を求めた。

(2) 再テスト法による尺度安定性の検討

調査2では、調査1で精選したSEINSを用

いて1回目の質問紙調査を行い、2週間の期間を置いて再テストを実施した。1回目調査のSEINS得点と再テスト時のSEINS得点のPearsonの積率相関係数を求め、それを信頼性係数とした。

4) 基準関連妥当性の検討

調査2では、共通概念を有するMEISとのPearsonの積率相関係数を算出した。

5) 属性とSEINSとの関連の検討

調査2では、SEINS得点と身体的健康感およびストレス感においてCramerの連関係数を算出した。

7. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究者は研究参加者の次の権利を擁護しながら研究を遂行した。①自己決定の権利、②任意コードが記載された質問紙は、本人が特定されないように厳重に管理し、プライバシーおよび秘密が保護される権利、③全面的な情報開示を受ける権利：本研究の成果資料を提示する、④危害を加えられない権利：学生の成績（評価）には一切反映されない、また⑤研究で得られたデータは本研究以外に使用しないこと、以上を口頭あるいは文書で説明し、参加の同意を得られ

た者のみに調査を行った。

本研究は富山大学臨床・疫学等に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結 果

1. 質問紙の配布と回収

調査1の対象者における回収数は301部（回収率98.0%）であり、有効回答である284部（有効回答率94.4%）を分析対象とした。

調査2の対象者における回収数は79部（回収率100%）であり、有効回答である79部（有効回答率100%）を分析対象とした。

2. 対象者の属性

調査2における属性について、男性8名（10.1%）、女性71名（89.9%）で、平均年齢は21.32±0.59であった。身体的健康感は、「悪い」17名（21.5%）、「良い」62名（78.5%）であった。ストレス感では、「ある」57名（72.2%）、「ない」22名（27.8%）であった（表1）。

3. 項目分析

SEINS原案の各質問項目における、すべての

表 1. 対象者の属性 (N=79)

		人数	%
性別	男性	8	10.1
	女性	71	89.9
年齢	20	1	1.3
	21	56	70.9
	22	18	22.8
	23	4	5.1
身体的健康感	とても悪い	1	1.3
	あまり良くない	16	20.3
	少し良い	34	43.0
	とても良い	28	35.4
ストレス感	とても感じている	7	8.9
	少し感じている	50	63.3
	あまり感じていない	21	26.6
	全く感じていない	1	1.3

有効回答は選択肢1から6を用いて回答されていた。また、すべての質問項目での平均値±標準偏差で天井効果およびフロア効果を示す項目はなく、全12項目を分析対象とした。なお、対象者が獲得したSEINS得点は18点から44点の範囲であり、平均値は31.39±4.85、中央値は32であった。

4. 因子分析および因子の命名

SEINS 原案作成において参照としたISSは独立した3変数で構成されているため、最初にvarimax回転を用い、SEINSの全12質問項目を用いて因子分析を行った。その結果、因子間に相関が認められたため、次に重みづけのない最小2乗法-promax回転を用いて因子分析を行った。引き続き、因子負荷量0.35以下の項目および複数の因子に高い負荷量を持つ因子を削除し、 α 係数の変化を確認しながら分析を行った結果、参照としたISSの3変数とは異なる因子構造となり、最終的には8項目2因子が抽出され、これをSEINS完成版として採択した。

第I因子4項目(項目番号③④⑤⑪)は、看護において自分にとって有意義な目標を定め、それを達成しようとする自己意識を示す内容であることから、【達成志向】と命名し、「看護の方向性を見定め達成しようとする自己意識」と定義した。第II因子4項目(項目番号①②⑨⑫)は積極的に看

護に関わり、貢献しようという自己意識を示す内容であることから、【寄与志向】と命名し、「看護に積極的に寄与しようとする自己意識」と定義した。

各因子の寄与率は第I因子32.91%、第II因子6.58%であり、累積寄与率は39.5%であった。因子間相関係数は0.63であった(表2)。

5. 信頼性

1) 内的整合性

調査1において、SEINS尺度全体のCronbachの α 係数を算出した結果は0.77であった。各下位尺度の α 係数は、【達成志向】0.69、【寄与志向】0.66であった(表2)。

2) 再テスト法による尺度安定性

調査2での再テスト法における有効回答数は78部(有効回答率98.7%)。1回目調査と再テストにおけるSEINS総得点のPearsonの積率相関係数は0.82であった。各下位尺度の相関係数は、【達成志向】0.71、【寄与志向】0.81であった(表3)。

6. 妥当性

調査2では、SEINSと共通概念を有するMEISを用いて基準関連妥当性を検討した。MEISとの関連では、 $r=0.58$ ($p<0.01$)と中程度

表2. SEINS原案の因子分析の結果(N=284)

項目		因子負荷量	
		第I因子	第II因子
重みづけのない最小2乗法-promax回転			
尺度全体 $\alpha=0.77$			
第I因子 【達成志向】 4項目 $\alpha=0.69$			
③自分がどんな看護学生で、何を望み行おうとしているのかわかっている。		0.89	-0.23
⑤これまで、看護に関して、自主的な決断をしたことはない。(*)		0.59	-0.11
④看護で「こんなことがしたい」という確かなイメージを、持っていない。(*)		0.57	0.06
⑪意味のある看護ができると思う。		0.49	0.16
第II因子 【寄与志向】 4項目 $\alpha=0.66$			
⑫看護よりも、他にやるべきことがあると思う。(*)		-0.28	0.59
②看護に対して、やる気がおきない。(*)		0.25	0.57
①看護力を高めるために、努力している。		0.16	0.51
⑨看護のために、できる限りのことをしようと思う。		0.33	0.36
回転後の負荷量平方和		2.46	1.97
寄与率(%)		32.91	6.58
累積寄与率(%)		32.91	39.50
因子間相関(第I因子)			0.63

注：(*)は逆転項目を示す。

の相関を認めた。各下位尺度における Pearson の積率相関係数は、【斉一連続性】0.45, 【対自的同一性】0.50, 【対他的同一性】0.39, 【心理社会的同一性】0.55であった (表4)。

7. SEINS の判定基準

SEINS の指標判定については、SEINS 下位尺度間において正の相関 ($r=0.63$) が認められたこと、また Shapiro-Wilk の検定により SEINS 得点の分布において正規分布 ($W=0.99, p=0.20$) が確認されたことから、看護学生アイデンティティを判定することが可能であると判断した。判定基準の根拠としては、本尺度で獲得しうる最低合計点数8点から最高合計点数48点までの得点範囲を5分割し、下位2分割の得点範囲をアイデンティティ拡散傾向、上位2分割の得点範囲をアイデンティティ確立傾向、中間の得点範囲をモラトリアムとした。また、Cronbach の α 係数より、SEINS 全8項目で示される尺度全体については十分な信頼性が得られたが、各下位尺度に関しては α 係数が0.7未満であるため、本研究では SEINS 全8項目の合計得点のみを看護学生アイデンティティの判定指標として採用することとした。

SEINS 得点による判定基準については、以下の通りとした。

【33点以上】アイデンティティ確立傾向：看護師

を目指す一貫した自己意識が高い状態

【24-32点】モラトリアム：看護師を目指す自己意識が猶予中である状態

【23点以下】アイデンティティ拡散傾向：看護師を目指す一貫した自己意識が低い状態

8. 属性との関連

調査2では、SEINS 判定と身体的健康感およびストレス感の関連を検討した。その結果、身体的健康感については Cramer の連関係数 $V=0.28$ ($p<0.05$) が得られた (表5)。なお、ストレス感については Cramer の連関係数 $V=0.14$ ($p=0.45$) であった。

考 察

1. 信頼性の検討

SEINS の α 係数は、尺度全体が0.77, 【達成志向】0.69, 【寄与志向】0.66であることから尺度の信頼性は確保されたと考える。また、再テスト法から得られた信頼性係数は、総得点で0.82, 【達成志向】0.71, 【寄与志向】0.81であることから高い再現性が確認された。したがって、SEINS の信頼性は十分確保されたと考える。

2. 妥当性の検討

基準尺度とした MEIS との相関によって基準

表3. 再テスト法による信頼性係数 (N=79)

		1回目		
		第I因子	第II因子	SEINS 総得点
2回目	第I因子	0.71		
	第II因子		0.81	
	SEINS 総得点			0.82

Pearson の相関係数

表4. 基準関連妥当性 (N=79)

		多次元自我同一性尺度 (MEIS)				MEIS 得点
		斉一連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	
SEINS	第I因子	0.40	0.57	0.37	0.46	0.55
	第II因子	0.37	0.30	0.30	0.49	0.44
	SEINS 得点	0.45	0.50	0.39	0.55	0.58**

Pearson の相関係数 (** $p<0.01$)

関連妥当性が確認された。また、SEINS 得点と「自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚」を測定する MEIS 下位尺度【対自的同一性】において $r=0.50$ の正の相関を認めたこと、「自分と社会との適応的な結びつきの感覚」を測定する MEIS 下位尺度【心理社会的同一性】との間に $r=0.55$ の正の相関を認めたことにより、「看護の方向性を見定め達成しようとする自己意識」と「看護に積極的に寄与しようとする自己意識」の下位概念からなる SEINS の構成概念の妥当性が確保されたと考える。

3. SEINS の構成内容

SEINS 原案の作成時点では、12項目3因子（【現在の自己投入】質問項目①②③④，【過去の危機】質問項目⑤⑥⑦⑧，【将来の自己投入への希求】質問項目⑨⑩⑪⑫）が想定されていた。しかし、因子分析の結果からは、SEINS 第 I 因子に質問項目③④⑤⑪，SEINS 第 II 因子に質問項目①②⑨⑫がまとめられ、質問項目⑥⑦⑧⑩は削除された。【過去の危機】に属する質問項目⑥⑦⑧が削除された理由としては、1～4年の看護学生歴においてアイデンティティが脅かされる危機を経験した看護学生が全体的に少なかったため、と考えられる。質問項目⑩が削除された理由としては、質問「看護のためなら、言われるままに動いてもかまわない」に対し多くの看護学生が他者からの操作に抵抗（独自性）を示したことにより因子としての共通性を保持できなかったため、と考えられる。

ISS と同様の 3 因子構造とならなかった理由としては、対象を看護学生に限定したことにより、

一般大学生とは異なる看護学生特有のアイデンティティ構成要素が抽出されたためと考えられる。ISS は1983年に開発されたものであり、時代を経ることによる看護学生を取り巻く状況の変化などから看護学生の特性が変化した可能性も考えられる。したがって、現代の看護学生を対象として抽出された SEINS の構成要素は、現代の看護学生アイデンティティの特徴を表しているといえる。

4. SEINS 開発の意義と活用

今回開発した SEINS は、信頼性と妥当性が確保された 8 項目の少数項目からなる簡便な尺度である。使用対象者が学生であることから、負担の少ない項目数、結果判定の容易さ、また判定の明確さが SEINS の有用性として明示できる。また、SEINS 得点と身体的健康感との連関から、身体的不調を自覚している場合には、看護学生としてのアイデンティティが拡散傾向にあることも示唆されている。

看護学生が SEINS を定期的・継続的に利用することで、看護学生としてのアイデンティティを客観的に自己理解することができる。また、看護教員が SEINS を利用することで、学生の看護師を目指す意識のあり方を把握することができる。さらに、その結果を看護への心理的適応の指標として活用することで、学生の心理的状态に合わせた学習支援の一助になることも期待される。

本研究の限界と課題として、SEINS の因子寄与率が39.5%であることから看護学生としてのアイデンティティを十分に捉えているとはいえない点があげられる。アイデンティティは複雑な概念であるため、今後は更なる看護学生のアイデンティティ要素に関する検討を行い、説明力（因子寄与

表 5. 身体的健康感と SEINS 得点の関連 (N=79)

Cramer V =0.28 (p<0.05)		SEINS 判定			合計
		アイデンティティ 拡散傾向	モラトリアム	アイデンティティ 確立傾向	
身体的	悪い	3	11	3	17
健康感	良い	3	31	28	62
	合計	6	42	31	79

注：身体的健康感は 4 件法で調査し、「1.とても悪い」と「2.あまり良くない」を悪いとし、「3.少し良い」と「4.とても良い」を「良い」とした。

率) の高い尺度へと改善していく必要がある。SEINS は学生のアイデンティティ状態について、モラトリウムを含む3分類を可能とする尺度である。この学生のモラトリウムについて、下山(1992) は、「回避」「拡散」「延期」「模索」の4因子を見いだしている¹²⁾。このようにモラトリウムにはいくつかの下位構成要素があると考えられ、SEINS の説明力を高める方略として看護学生アイデンティティの分類検討が残されている。

SEINS の使用が簡便である反面、詳細なアイデンティティの状態を示すことができない点については、SEINS の微視限界である。

結 論

本研究では、看護師を目指す一貫した自己意識であるアイデンティティに着目し、看護学生としてのアイデンティティを測定する看護学生アイデンティティ尺度の開発と、その信頼性と妥当性の検討を行った。その結果、信頼性・妥当性の確保された8項目2因子(【達成志向】【寄与志向】)で構成される看護学生アイデンティティ尺度(SEINS: Scale of Ego-Identity for Nursing Student)が開発された。

謝 辞

本研究のためにご協力いただきました皆様に、心から感謝いたします。

文 献

- 1) Erikson, E. H.: Identity and The Life Cycle. International University Press, New York, 1959. (小此木啓吾訳編: 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房, 東京, 1987.)
- 2) 無藤清子: 「自我同一性地位面談」の検討と大学生の自我同一性. 教育心理学研究 31:292-302, 1979.
- 3) 鈴木貴美子, 長江美代子: 大学生の友人関係のありかたとアイデンティティの発達. 日本赤十字豊田看護大学紀要 7(1), 133-144, 2012.
- 4) 水野正憲, 李正姫: 自我同一性に関する日韓大学生の比較. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録 149, 9-18, 2012.
- 5) Erikson, E. H.: Childhood and Society. W. W. Norton & Company, New York, 1963. (仁科弥生訳: 幼児期と社会 I. みすず書房, 東京, 1994.)
- 6) Munly, P. H.: Erik Erikson's Theory of Psychosocial Development and Career Development. Journal of Vocational Behavior 10:261-269, 1977.
- 7) 加藤厚: 大学生における同一性の諸相とその構造. 教育心理学研究 31(4):20-30, 1983.
- 8) マイマイティ パリダ, 落合幸子他: 職業的アイデンティティを高める実習直前指導が看護学実習での学びに及ぼす効果. 茨城県立医療大学紀要 14:77-86, 2009.
- 9) Marcia, J. E.: Identity in Adolescence, Handbook of Adolescence Psychology. Journal Adolescence: 109, Willy & Sons, New York, 1980.
- 10) Marcia, J. E.: Development and validation of ego identity status. J. of Personal and social Psychology 3:551-558, 1966.
- 11) 谷冬彦: 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成. 教育心理学研究 49:265-273, 2001.
- 12) 下山晴彦: 大学生のモラトリウムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—. 教育心理学研究 40(2):121-129, 1992.

Development of a Scale of Ego-Identity for Nursing Student (SEINS) and investigation of its reliability and validity

Minako HAMADA¹⁾, Hayato HIGA²⁾
Izumi TANAKA²⁾, Keiko YAMADA²⁾

1) Medical Corporation HOSPYP Urata Clinic

2) Department of Psychiatric Nursing, Graduate School of Medicine
and Pharmaceutical Sciences, University of Toyama

Abstract

[Aim] We developed a Scale of Ego-Identity for Nursing Student (SEINS) to measure individual students' identity (coherent sense of self aspired for by nurses) as nurses, and investigated its reliability and validity.

[Methods] First, with reference to the 12-item Identity Status Scale (ISS), we created a draft 12-item, 6- Likert scale. Next, using this draft we conducted a questionnaire survey and factor analysis with 313 subjects in nursing student Group A. Finally, using the post-factor analysis scale, we investigated its reliability and validity in 79 subjects in nursing student Group B. Attributes, one item on sense of physical health, one item on sense of strength, and a 4-factor, 20-item identity scale (MEIS) were added to the questionnaire.

[Results] Valid responses were received from 284 subjects in nursing student Group A, and from 78 subjects in nursing student Group B. The results of a factor analysis by unweighted least squares-promax rotation identified 8 items and 2 factors. Factor I with four items was called "achievement orientation," and Factor II with four items was called "contribution or ientation." The between-factors correlation coefficient for Achievement orientation and Contribution orientation was 0.63. A scale consisting of these 8 items was taken to be SEINS. The cumulative contribution ratio after factor extraction was 39.50%.

[Discussion] The reliability of SEINS was confirmed with a Cronbach coefficient of $\alpha=0.77$ and reliability coefficient of $r=0.82$ by test-retest method. The validity of SEINS was confirmed with a correlation coefficient of $r=0.58$ ($p<0.01$) with MEIS as a reference scale. A Cramer association coefficient of $V=0.28$ ($p<0.05$) was confirmed for SEINS and sense of physical health. The reliability of SEINS was ensured from the value of Cronbach's coefficient and the value of the reliability coefficient with a test-retest method. The validity of SEINS was ensured from the value of the correlation coefficient with MEIS, which has a common concept with SEINS. Here, since the subscales of MEIS, which is positively correlated with SEINS, include "psychosocial identity (sense of adaptive links with society)" and "for oneself identity" (sense of clarity of self-awareness), and considering the content of the subscales of SEINS, Achievement orientation is defined as "self-awareness in which one attempts to discern and the direction of nursing and achieve its aims," and Contribution orientation is defined as "self-awareness in which one attempts to actively contribute to nu

rsing.” It was possible to show the indices of SEINS with the total score of 2 factors (8-48) from the between-factors correlation and score distribution of Achievement orientation and Contribution orientation. Consequently, identity status was determined as follows: ≤ 23 points: tendency to diffuse identity; 24-32 points: moratorium; ≥ 33 points: tendency to establish identity. The value of the association coefficient between SEINS and sense of physical health suggests interconnectedness between identity status (diffusion-establishment) and sense of physical health (bad-good). From the above investigation of reliability and validity, the SEINS scale developed in this study is judged to be a practicable scale.

Key words

Nursing student, Identity, Development of a scale